

マンガ「片町夜曲(セレナーデ)」 # 1 7 原作シナリオ

山崎浩治

1 「居酒屋まわりみち」店内

キャバ嬢姿の美鈴が来店し、カウンター席にいるあかり(ドレス姿)の隣に腰を下ろす。

美鈴「(あかりに)お客さんとアフター断ってきたわ。話って何よ」

あかり「(ひそひそ話で)明日、実家の親が金沢にくるの」

美鈴「サトシ君……じゃなかった、あかりちゃんの実家って関東の方だったよね」

あかり「(頷いて)あたしの部屋、女物の洋服だらけでしょ。いまさら片付けられないし」

美鈴「両親はサトシ君の趣味、知らないんだ？」

あかり「大学で金沢に来てから始めたから……」

美鈴「分かった！ 女物の洋服、あたしの部屋に隠したいのね！」

あかり「そうじゃなくって……美鈴さん、あたしと同棲してることにしてほしいの」

美鈴「はああ？ そんなの絶対ムリ！」

2 サトシ(あかり)の部屋・キッチン

ご機嫌で料理を作っている美鈴。その傍らにサトシがいる。

サトシ「キョヒってたわりに美鈴さん、ノリノリだね」

美鈴「せっかくご両親が来るんだもん、肉じゃがくらいご馳走してあげなきゃ」

サトシ「料理できるの？」

美鈴「クックパッド先生が何でも教えてくれるわよ」

× ×

黒焦げになった鍋の中。

美鈴「(激しく落ち込んで)あ～～」

サトシ「僕がやるよ(と器用に包丁を使い出す)」

× ×

完成した肉じゃが。

美鈴「(味見して)美味しい！」

サトシ「実家にいたころ食べてたおふくろの味。このままじゃ僕が作ったってバレちゃうから味をアレンジしとかなきゃ……」

美鈴「(悲しげに)あたしね……お母さんの手料理、ほとんど食べたことないの」

3 木造アパートの一室(美鈴の回想)

一人でテレビを見ている幼児の美鈴。

美鈴のM「両親が離婚したのはあたしが保育所のころ。それからお母さんはお水の仕事を始めたんだ」

テーブルに置かれたカップ麺を美鈴、食べている。

美鈴のM「お母さんはいつもカップ麺かコンビニのお弁当を置いて仕事に行ってた。あたしはお

腹が空いたらご飯を食べて、眠くなったら寝るの」

布団を敷いて一人で眠る小学生くらいの美鈴。

次の朝、酔っ払ってそのまま眠ったらしい母親が美鈴の横で寝息を立てている。

美鈴のM「朝起きると、帰ってきたお母さんが寝てるけど、`起こさないで、て言われてるから静かに支度して学校に行ったわ」

ランドセルを背負って部屋を出ていく美鈴。

4 通学路を歩く美鈴の小さな背中(回想)

美鈴のM「そんなお母さんが男の人のところに入り浸って帰ってこなくなったのは小学校の時。あたしは施設に保護されて、高校卒業までそこで暮らしたんだ」

5 サトシの部屋・リビング(現在)

向かい合っている美鈴とサトシ。

サトシ「美鈴さん、ママになるのが夢って言ったよね」

美鈴「いいお母さんになりたいんだ」

サトシ「(美鈴を見つめて)美鈴さんならなれると思うよ」

その時、インターホンが鳴った。

サトシ「親父とおふくろが来た！ 美鈴さん、お芝居よろしく(と美鈴に拝む)」

× ×

食卓を囲んでいる美鈴とサトシ、サトシの両親(哲夫と雅子)。

哲夫「サトシがいつもお世話になっています」

美鈴「(緊張して)こちらこそお世話になっています！」

サトシ「美鈴さんが作ってくれた肉じゃがを食べようよ。いただきま〜す！」

雅子「(一口食べて)美味しいわ、この肉じゃがが……ねえあなた」

哲夫「母さんのより美味しいよ！」

美鈴「いやあ……あははは」

雅子「この前、掃除したらサトシの通知表が出てきたのよ。ほら、2と3ばかり(と通知簿を差し出す)」

サトシ「やめてよ、母さん！」

和気あいあいと話すサトシ家族を羨ましそうに見ている美鈴。

美鈴のM「これが家族なんだね……こんなふうにご飯食べるの初めて……」

雅子「美鈴さん、サトシったら勉強も運動も苦手だったのよ」

美鈴「3があるだけいいですよ！ あたしの通知表なんて、1と2ばかりでしたよ！」

雅子「あらまあ……」

哲夫「美鈴さんはサトシとどこで知り合ったんだい？」

美鈴「(何か言いかけて)……」

サトシ「(遮って)会社の同僚だよ」

雅子「それじゃ、OLさんね」

美鈴「あたし、キャバ嬢なんです。お水やってます」

気まずい雰囲気になる食卓。

美鈴「この肉じゃがだって本当はサトシ君が作ったんですよ。あたしは料理なんて全然ダメ……
ごめんなさい、ウソついて(ぺこりと頭を下げる)」

雅子「(クスッと笑い)美鈴さんは正直ねえ」

哲夫「(サトシに)サトシは美鈴さんのこと、好きなんだろう。顔見てりゃ分かる」

サトシ「僕、美鈴さんと結婚するつもりなんだ」

美鈴「ちょ、ちょっとサトシ君……」

サトシ「(美鈴にキッパリと)僕、本気だから」

美鈴「(固まって)……」

雅子「(バッグからネックレスを取り出して美鈴に)これ、母の形見のネックレス。美鈴さんにもら
ってほしくて持ってきたのよ」

美鈴「そんな大切な物、もらえません！」

雅子「大切な物だから、あなたにあげたいんじゃない」

哲夫「サトシはちょっと頼りないけど、優しいだけ取り柄の男です。どうかよろしく願いし
ます」

深々と頭を下げる哲夫と雅子。

美鈴「(目がウルウルして)……」

＃6 サトシの寝室(夜)

川の字で寝ているサトシ、雅子、哲夫。

哲夫「美鈴さんを不幸にしたら承知せんぞ」

サトシ「分かってるって」

＃7 隣の寝室

横になって会話を聞く美鈴が泣いている。

＃8 金沢駅・新幹線ホーム(翌日)

哲夫と雅子を見送りに来ている美鈴とサトシ。

哲夫「元気でやれよ、サトシ」

雅子「今度はうちに遊びに来てね、美鈴さん」

手を上げて新幹線に乗り込んでいく哲夫と雅子。

＃9 片町(夜)

歩いてくるドレス姿の美鈴とあかり。

美鈴「ねえ、あたしたち本当に一緒に暮らさない？ その方が家賃も安くなるし」

あかり「ありがと、美鈴さん！」

美鈴「カン違いしないでよ。ルームシェアするだけなんだから！」

微笑む美鈴の首に雅子からもらったネックレスが輝いている。

楽しげに歩いていく美鈴とあかりの後ろ姿。